【東京アートポイント計画について】東京アートポイント計画は、社会に対して新たな価値観や創造的な活動を生み出すためのさまざまな「アートポイント」をつくるために、東京都と公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京が、地域社会を担うNPOとともに展開している事業です。実験的なアートプロジェクトをとおして、個人が豊かに生きていくための関係づくりや創造的な活動が生まれる仕組みづくりに取り組んでいます。https://www.artscouncil-tokyo.jp/

ARTS COUNCIL TOKYO

「編集者」田尾圭一郎（田尾企画 編集室）／「デザイン・編集・執筆」一般社団法人ACKT（「執筆（一部）」田辺直美和泉龍／「発行」ACKT（アクト／アートセンタークニタチ）／令和6(2024)年3月発行／「主催」東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京、協定外、公益財団法人くにたち文化・スポーツ振興財団、一般社団法人ACKT／※「ACKT（アクト／アートセンタークニタチ）」は東京アートポイント計画の一事業として運営しています。

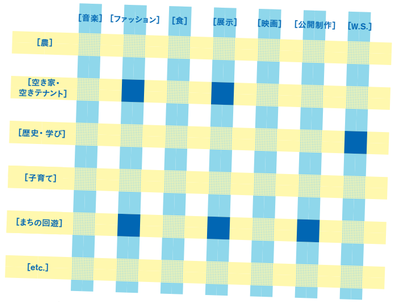
……メールニュース配信……

ACKTの活動に関する最新情報などをメールニュースでお伝えしています。ご興味のある方はぜひご登録ください。

ご登録はこちら

【ACKT(アクト／アートセンタークニタチ)について】

ACKTはまちなかで生まれる多様なプログラムを通して、アーティストや市民・市外の参加者と交流をしながら活動し、ともに成長していくためのアートプロジェクトです。「まちを舞台に編まれる芸術と文化」をテーマにしたプログラムやアクションを通じて、新たなまちの価値を生み出していきます。



【活動について】

ACKTはひとつのプログラムだけを進めるのではなく、上記の図にあるような社会課題と、様々なアートの分野が交わる、[芸術と文化／スペースと人] の交差点をつくりだします。

【LAND】

VOL. 03 | 藝（げい）とスタジオ（ファンタジア！ファンタジア！ ー生き方がかたちになったまちー）

様々なまちを訪れ、気になる活動を行うスペースを紹介する「LAND」。3回目に訪れたのは、墨田区東向島にある「藝とスタジオ」です。「藝とスタジオ」を拠点に活動する「ファンタジア！ファンタジア！ ー生き方がかたちになったまちー」のディレクターを務める青木彬さんにお話を伺いました。

——「藝とスタジオ」について教えてください。

以前まで[アートプロジェクト「ファンタジア！ファンタジア！ ー生き方がかたちになったまちー」（以下、ファンファン）の拠点は墨田区の京島という場所にあったのですが、2020年に移転して始まったのが「藝とスタジオ」（以下、「藝と」）です。2階建ての建物で、1階をファンファンの拠点として利用していて、これまでの発行物やプロジェクトの関連書籍、墨田区で過去に行われた文化事業のアーカイブ資料が入っている本棚があったり、リソグラフの印刷機があったりします。2階は建築家やアーティストとのシェアオフィスになっています。「藝と」では月に数回、週1ぐらいを目安にオープンスタジオの日を設けているのですが、オープン時のプログラムは日によって違います。例えば今日は「ソーシャルワーカーを目指すキュレーターの自習室」を行っているのですが、これは今、僕が社会福祉の勉強のために通信で大学に通っているので、大学の課題を行う日をオープンスタジオにしちゃおう！と思って始めたものです。自習室と称して開けているのですが、近隣のソーシャルワーカーの人たちが噂を聞きつけて遊びにきてくれたり、みんなで勉強したいものを持ち寄って黙々と勉強したり、いい時間になっています。他にはリソグラフのワークショップやトークイベントなどを行ってみたり、タイミングによって様々な活動があります。

——ファンファンの活動の中での「藝と」の役割はなんでしょうか？

以前、足立区のアートプロジェクト[アートアクセスあだち 音まち千住の縁]で拠点「仲町の家」を運営している吉田武司さんと拠点についてのディスカッションをしたときがあって、「仲町の家」はギャラリーのような、作品の発表の場として維持している場所になっていました。一方で僕らの拠点は、発表を行うためというよりも自分たちの事務所、表現をするための準備を行うアトリエになっています。同じ拠点でも[ショーケース]と[アトリエ]という違う性質を持った場所になっていて、「『藝と』はみんなで話し合ったり、活動を行って考えを深めていくのに適した場所だよね。」ということを言われて確かに。」と思いました。これまでファンファンは福祉施設とか空いてた工場とか、まちの中をショーケースにしていたんですよね。これはオルタレというグループと展示を企画したときもそうですよね。それでもまちの方たちが活動を続けていって10年後くらいにもう一度全ての作品を再展示したら、まちの中で芸術祭ができるね、なんてことも考えていました。

——「藝とスタジオ」をアトリエにまちをショーケースとして活動するファンファン。今後、展開されるプロジェクトにも注目していきたいですね。

PROFILE

青木彬（インディペンデント・キュレーター）｜一般社団法人藝とディレクター、一般社団法人ニューマネジワリシャ理事。1989年東京都生まれ。東京都立大学インダストリアルアートコース卒業。アートを「よりよく生きるための術」と捉え、アーティストや企業、自治体と協働して様々なアートプロジェクトを企画している。これまでの主な活動にまちを学びの場に見立てる「ファンタジア！ファンタジア！ー生き方がかたちになったまちー」（東京都、東京アートポイント計画、2018年〜）ディレクターなど。

インタビューのロング ver. を公開中！こちらをチェック→

INFORMATION

藝とスタジオ
東京都墨田区東向島5-23-3

まちを舞台に芸術と文化を編む「ACKT」の紙面プログラム

OZINE

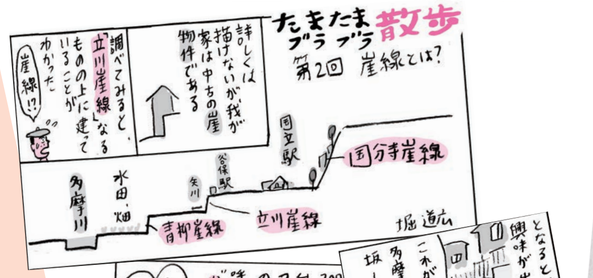
－エンジン－

ACKT 02

エンカウント・ザ・ワールド!!

～コミュニティに続く、世界との出逢いかた～

金田涼子〈でんぐり山〉2020年



堀道広｜1975年富山県生まれ、国立市在住。うるし漫画家。うるしと漫画に特化した活動を続ける。『多摩全縁ぎ部』部長　近著『うるしと漫画とワタシ―そのホリジンタルな仕事〜』（駒草出版）等。

【CAST】

VOL. 03 | 金田涼子（かねたりょうこ）（美術家）

ACKTでは、まちなかで新しい動きを作る人やそこに参加する人を【CAST】と呼びます。そんなCASTのさまざまな活動をピックアップし紹介する連載。第3回目はACKTの行うプログラムの一つである「Kunitachi Art Center」の企画に携わり、「○ZINE ACKT02」の表紙を担当した作家、金田涼子さんにお話を伺いました。

——ご自身の活動について教えてください。

普段はペインターとして、お世話になっているギャラリーや所属先などを通じて、個展やグループ展、アートフェアなどで作品を発表しています。また「199X」という90年代生まれのキャラクター表現の作家を集めたグループ展を2012年から毎年キュレーションしています。

——なぜ、現在の作風になったのですか？

絵柄についてはよく聞かれていたのですが、私は小さい頃からアニメ・漫画・ゲームなどに触れてきていて、絵を描き始めたきっかけも漫画やアニメのイラストからでした。美大に入り、作家活動をしようかというのが見え始めて作品制作を考えたときに、自分の生まれ持っている漫画的表現という所と、元々日本美術、浮世絵や日本画もすごく好きだったので、日本画などの平面的な表現と今のキャラクター表現を掛け合わせることにより、なにか自分の一つの絵面になるのではないかと思いました。絵柄は現代的な表現を入れつつ、大きい作品は、日本画独特のパースであったりとか空間を分ける技法みたいなものを取り入れたりして絵画を制作していますね。

——自然のモチーフが多いことにも理由があるのでしょうか？

昔の人が山や海とか、大きいものを見て神様の存在…、目に見えない、認知できないものを感じる、という思想がすごく好きでした。コロナ前には実際に各地を訪れて、宗教としてではなく、その土地に根付いた昔からの伝承など、見聞きしたものをテーマに描いたりしていました。目に見えない大きな存在を人々が恐れたときに神様として、自分たちと同じ人のカタチに例えて名前をつけることがあります。そうして伝承していたものを自分のキャラクター表現を通して描く、といった感じですね。

——最後に今後の展望などを教えてください。

活動する国は増やしていきたいなと思います。現在は国内やアジア圏での活動が多いのですが、アメリカやヨーロッパなどでも展示できたらいいなと思います。一つの国にしぼらずさまざまな場所に拠点を置くことで、活動を途絶えることなく続けていけるかなという気持ちもありますし、純粋に作家として様々な国で作品を見てもらいたい思いもあって近年の目標になっています。

——古来より人々が日々の営みの中で伝承してきた自然への考え方と金田さん自身がその手で触れ、慣れ親しんできた日本カルチャー。その両方を融和し昇華したものが金田さん自身の表現となっているのですね。作品に込められた想いの一端を感じることができました。

PROFILE

金田涼子｜1991年茨城県生まれ。横浜美術大学卒業。神や自然現象など人知を超えた存在を大小様々な女の子たちを描くことにより表現している。近年では日本の土着的な文化や日常的な気配などをテーマとした作品を多く制作。主な個展として「雪月花」宝龍美術館（上海、2023年）、「from beyond the sea」ARTTRIO（シンガポール、2023年）などがある。2012年から同時代のキャラクター表現を模索する試みとして「199X」を主催している。

インタビューのロング ver. を公開中！こちらをチェック→

Kunitachi Art Center 2023
2023/05/20－2023/6/04

国立市内および近辺に点在するアトリエ・ギャラリー・店舗を会場に展示とともを横断するプログラム、Kunitachi Art Center 2023を行いました。「くにたち市民芸術小ホール」での公開制作プログラムや、展示を行う各スペースを作家のアテンドで巡るツアーの開催など、より日常に寄り添ったかたちで文化を発信しました。国立市内全域をフィールドとして来場者自らが展示を巡り、回遊することで、普段は見ることのできない制作の裏側や、作家本人とのコミュニケーションの中で生まれる、作品鑑賞だけではない面白さやその余白を感じることができたのではないでしょうか。

宵宮リサーチ
2023/09/23

ACKTの活動地域である国立市には1,000年以上の歴史を持つ東日本最古の天満宮、谷保天満宮があります。そんな谷保天満宮で毎年開催される谷保天満宮例大祭の宵宮にて、執り行われる神事「古式獅子舞」は国立市の指定無形民俗文化財となっています。ACKTは国立市についての知見を深めるリサーチ活動の一環として宵宮へ訪問し、古式獅子舞の見学を行いました。宵宮のリサーチは、国立市の歴史に触れ、地域の方々の谷保天満宮やまちの歴史を継承していくことへの想いに理解を深める時間となりました。

ACKT'S ACTION

上映会
『ラジオ下神白（しもかみしろ） ― あのとき あのまちの音楽から いまここへ』
2023/07/02

既存の枠組みに捉われないまちなかでの活動をアートプロジェクト、文化や芸術の可能性に触れるラーニングプログラムとして、映画『ラジオ下神白 ―あのとき あのまちの音楽から いまここへ』の上映会を開催しました。実際にアートプロジェクトを展開してきた文化活動家・アサダワタルさんをゲストに迎え、福島県いわき市の復興公営住宅でのプロジェクトの様子を収めた映画を鑑賞。アフタートークでは、アサダさんと共にプロジェクトの進め方や考え方についての知見を共有しました。

白川郷の合掌造り民家を支える「結」というエコシステム

取材・文＝加藤慶介　撮影＝白川村

「結」は、人と人とを結ぶ。

1969年、白川郷（岐阜県）と世界遺産に登録された。世界中から年間170万人もの観光客が訪れる。「合掌造り」は、茅葺き屋根の大きな家屋。1棟の建築に、約300人の人手と約3年の歳月を要する。今、その茅葺き屋根の葺き替えを支えているのは、「結」という、地域ぐるみの相互扶助システムだ。

白川郷は、人口1,600人ほどの小さな村。高齢化率は、約40%。「このままだと、あと10年で、この村は、消えてしまうかもしれない。」と、地元の人たちは、口を揃えて言う。

「結」は、人と人とを結ぶ。

「結」は、人と人とを結ぶ。

「結」は、人と人とを結ぶ